

独りよがり

関西大学 社会安全研究センター 小澤 守

本を出版するというのは筆者の所属する工学分野では二の次で、まずはしっかりしたジャーナルに研究成果をきちんと報告することであり、Drコースの院生であったころから40年以上にわたって中心的な課題であった。しかしよく考えてみると、専門家でない一般市民に我々の主張や新規の発見あるいは物理的な説明が届くはずもない。つまり理系（理系、文系という分類は社会においてほとんど意味がない。あるとすれば大学においてだけであろう）というより筆者の場合は技術系という方が適切だろうが、その立場と異なって、いわゆる文系研究者たちが書籍を出版するのを課題としてきたのとは（最近は少々似通った面もあるが）大きな違いであった。

筆者が工学技術書籍の一部を執筆したり編集したりし始めた今から30年前頃には、出版社もまだ余裕があったのか、比較的分厚い書籍の出版を持ち掛けても断られることはなかった。ところが1990年代半ばになると特に学生向けには薄く薄くと要求され、200ページが限界で、それ以上は出版が難しくなった。筆者らが学んだ教科書など400ページはゆうにあるものも多く、大学卒業がはるか昔になった今でも参考にしている。どうして我が国の書籍事情、特に技術系の教科書などはこんなに軽薄になったのだろう。Web上にはありとあらゆることすべてが書いてあり、今更書籍を紐解く必要もないというのが今風の我が国の学生気質で、その学生たちに本を買ってもらおうとすれば軽薄廉価でなければならないというのが出版社の見解のようだ。それに引き換え海外はどうだ。筆者らの分野で名著の誉れも高いTransport Phenomenaという本は米国などでは大学の教科書として活用されており、なんと900ページ近くもある。技術屋として学ぶべき基本的なものの見方が懇切丁寧に記載されており、筆者が同僚と募って書いた教科書とは恥ずかしくて比較ができない。

先ごろ筆者の所属する学会の企画としてボイラや原発などのシリーズものを海外の出版社に打診したところ、あっさりと引き受けてくれた。筆者が執筆編集した“Advances in Power Boilers”という代物は、複数の企業の技術者たちの協力のもと、原理原則から説き起こし、実例を交えて丁寧に執筆され、500ページ近くという大作になった。これは、海外ではツールとしての知識や知見も大切だが、その背景にある原理や基本的な考え方、これをPhilosophy（哲学と訳さないでほしい）というが、それが大切にされている証左ではないかと思う。そういえばもう40年ほど前になるが、日本の学会に論文を提出した際、基本的な考え方に重点をおいて執筆したところ、「周知の事実である」として却下されたことがあった。同じ内容を米国の原子力関係の非常に著名な論文誌に投稿してみれば、「原理原則から説き起こしており、非常に良い」との評価を得て、ほとんど修正することなく掲載されたという経験を持っている。この辺りに、我が国がまだ明治の末期にErwin Bälzが言った「最新の成果をかれらから引継ぐだけで満足し、この成果をもたらした精神を学ぼうとはしない」ことから抜け出せていない理由を感じずにいられない。こじつけかもしれないが。

一方、いわゆる文系については、大学出版会や比較的小規模の出版社が、とて

も多く売れそうにない分厚い本を頑張って出版しているのは立派というほかない。大学出版会は営利目的ではなく所属教員の研究成果の発表の場として機能しているのだろう。

と、ここまで書いたのは実は筆者が過去10年にわたって連載してきた記事を取りまとめて書籍として出版しようとしたことに関係している。昔から付き合いのある出版社など数社あたってみたがどこも引き受けてくれない。たしかにそんなに売れる本でないのは重々承知であるが、内容がCO₂排出で最近とみに風当たりが厳しくなった火力ボイラの技術史だからか、ページ数が400ページにもなるからか、明確な理由は不明で、「残念ながら」だけしか答えが返ってこない。いずれにせよ筆者の自己満足のためだからと諦め、私費で出版できれば結構と思いなおして、いわゆる電子出版で出す方向に切り替えた。これだと内容にかかわらずかなり自由に出版ができるとのこと。本はやはりある程度の厚みがあって、枕にでもなれば十分といった筆者の古い考えは捨てよう決心した次第である。このコラムの読者にはほとんど関係しない本ではあるが、念のため書籍名は『蒸汽罐發達史』である。淀みに浮かぶ泡沫のように出沒し、また消え失せるのではあるだろうが。

